

寅さんのように  
・・・そして昭和。



江田島健児

寅さんのように・・・そして昭和。

---

自分はだれにも負けないほど映画“男はつらいよ。フーテンの寅”の寅さんの大ファンである。自分の辛さ悲しみを押し殺し、人の道と男の仁義を貫き通し、人に微笑みを残し、不遇な人に生きる力を与える寅さん。そんな寅さんのようにと、あんな寅さんの生き方ができればと、何度も心で思ったことがある。怯まず怖じ気ず、些細な事も面白可笑しく笑いに変え、自分が信じた道を生きる。しかし、できなかった。

寅さんは映画の中でしか生きることのできない人だからである。あの顔、あの体、あの服装に、あの帽子、それに腹巻と雪駄。映画の中で完全にフーテンの寅として創り上げられた人物像であるが、人間としての魅力が体の外にも内にも溢れている。的屋の寅さんは祭りや縁日を追って日本全国を旅して廻る。

さして金に困る寅さんは出てこないが、大金を持っている寅さんも見たことがない。しかし、自分が寅さんを思い出すのは金がない時、人生が虚しい時、人生に行き詰った時が多い。人生にやる気が失せてくると、「ちょっと、そこのお兄さん。そんなことで挫けちゃお仕舞よ。死ぬことや諦めることはいつだってできるさ。その前に、まだもうちょっと生きてみるこった。そしたら違った道が開けてくるかもしれないぜ。そうやって生きているのはアンター人だけじゃない、みんなそうなんだよ」、頭に浮かぶ寅さんがそんなことを言う。

自分に二つ年上の先輩がいた。我々はその昔、海軍兵学校と言えば江田島、江田島と言えば海軍兵学校と言われるくらい誉れの高い所でもあり、鬼が住むとも言われた日本で一番厳格な江田島の先輩と後輩である。その中に鬼みたいな顔をした怖い先輩がいた。江田島にいる時はとても怖くていつも先輩の顔を見るだけで肝を冷やしていた。海上自衛隊を退職して上京すると、江田島を中途退職した先輩が働く牛井屋でアルバイトとして一緒に仕事することになる。世間慣れした先輩は、頭の回転は早いし、饒舌で冗談も上手だった。綺麗な女性を見ると、途端にこの先輩の強くて張りのある声が弱くて柔らかくなってしまう。顔には赤味が増し、言葉はすぐ〇〇ちゃん化してしまい、敬語が一杯飛び出し、所作は信じられないほど優しくなってくる。それはもうフーテンの寅そっくりであった。

東京にいる間レストランのウェーター、掃除屋、氷屋のアルバイト、ラーメン屋の店員、パブ・レストランのマネージャー、ナイト・クラブのマネージャーをしながら見たもてる男のタイプは、寅さんや先輩のタイプだった。女性を笑わせるのが上手な男、気取って口数の少ない男よりも些細なことでも可笑しく面白く話す男、どんな失敗も平気で素直に受け止める男、違和感を取り除き女性に安心感を抱かせることのできる男は女性にもてたのである。自分はこれらの一つもできなかったから、日本にいる時は片思いだけが多くてもてなかった。男は少しくらいいい男でも無口は全然もてない。格好をつけても硬い話や表情の難しい顔をした男も女性には好かれない、のだ。

去年（2011年）七月に二週間ほど帰国した。今でも故郷の鹿児島県や都心から少し離れた姉の住む千葉県の郊外にはのどかな日本の風景を見ることができると、人が多く集まる都心は自分のはっきりと時代遅れを実感できるほど時代の先端を表現していた。新宿地下街の店のデコレ

ーションとそこを行き交う日本人のファッション。特に若い日本人のファッションには奇異さと違和感を覚えた。この中を寅さんが歩く姿を想像しても、ちっとも似つかわしくない。もう若い日本人にはあの寅さんのイメージが創造できないかも知れない。

時間と進歩。だれも止めることができない。世の中の進歩速度は格段に速くなっている。昭和と平成では生活様式も変わり、日本人の思考も道徳も変わってきている。そうであっても、日本人の生き方、生活様式はフーテンの寅に出てくるバック・グラウンドでいいのではないか、と思うのは自分一人だけの妄想にすぎないだろうか。

昨年からはまっているユーチューブで見る昔自分たちが憧れた歌手や歌は、完全に過去のものであることを知る。それが証拠に、あの頃若かった我らは皆年を取っている。しかし、最近の踊って歌う若いシンガー達の歌に比べると、歌詞の深さ、個性、歌唱力は異質のレベルへと変化している。

昭和の日本には世界の人々が認めた勤勉と努力があり、世界で一番安全な国があった。そして、日本全国に今よりは日本人が日本人を想う強い絆があり、葛飾柴又の団子屋“とらや”で繰り広げられる日常が日本の津々浦々にあった。

どちらかと言えば演歌で次がフォークだった自分が、その昔親友が好きだったシンガー・ソング・ライターの草分けと言われる歌手の動画、を見ているうちに動画の中に吸い込まれ、あたかも自分がそのコンサート場にいるような錯覚に陥り、コンサートに同化して心のボルテージがどんどん上昇するのを覚えた。六十を超えたシンガー・ソング・ライターの歌。こんなにも心を震わす昭和の歌手と歌に感銘をうけた。

そして今、自分は思う。昭和の寅さん、昭和の歌手、昭和の歌。懐かしさで思い出す昭和のそれらに日本人が持って生まれた人間性や心の機微を解した。コンピューターと携帯電話で発信される膨大で表面的な情報に心を抜かれ、機械的でロボット化し、情報で物事を判断する社会が何とも不気味である。

日本人は四季を愛で、人や背景の後ろに隠された心情や情景までも読み取る心の細やかさがあった。現在は全てを声に出して説明しなければ、説明不足だと批判されてしまう。“一を聞いて十を知る”、言葉の端々からその後ろに隠された情景を読み取る。日本人はその能力に優れていたから、概して外国人よりも言葉や口数の少ない国民でもあった、と思う。心を磨き心に応える民族、それが日本人の本来の民族性だった。昭和には、まだそれが満ち溢れていた。